

## B- I -16 食道癌根治術における呼吸理学療法の効果 術式による比較と検討

大阪市立大学医学部附属病院 リハビリテーション部

大谷 真由美

### 【目的】

食道癌根治術における呼吸理学療法(以下CPT)の効果について、術式と呼吸機能値、プログラムの達成度から検討した。

### 【方法】

対象は2003年11月から2005年11月までに当院にて食道癌根治術を施行した症例73名で平均年齢は61.1歳。術式は食道切除術、再建、3領域リンパ郭清術が一次的に施行された根治術で、開胸術による切除術38例、胸腔鏡による切除術35例。CPTの術前は手術の2週間前から呼吸訓練、咳嗽指導と呼吸機能評価を施行した。術後は手術翌日から呼吸機能の改善と術後合併症の予防を目的に呼吸訓練、排痰訓練と動作訓練を経時的に内容を変えて施行した。呼吸訓練は呼吸介助法を用いての呼吸訓練、排痰訓練としては体位ドレナージ、咳嗽指導を行った。加えて早期離床を目的に動作訓練を施行した。人工呼吸器は術後1日目に終了し、自発呼吸とした。動作訓練は術後1日目坐位、3日目端坐位、5日目酸素吸入下歩行、7日目酸素除去歩行、10日目院内歩行とし、動作毎に達成度を5段階で表した。呼吸機能値は肺活量と1秒量を術前とCPT終了時に測定した。CPTの終了基準は、呼吸困難感無く歩行が可能、有効な咳嗽が可能であることとした。術式とCPT終了時期、

術前後の呼吸機能値変化率はt検定、動作能力についての術式による比較ではカイ2乗検定を用いて検討した。

### 【結果】

1.CPT終了までの期間は、術式による有意差はなかった。2.術後合併症は、主に両側反回神経麻痺、肺炎、無気肺、嘔声が多かったが、術式による差は見られなかった。3.術前後における呼吸機能値の変化率については、1秒量において胸腔鏡群で大きく有意差が見られた。4.動作訓練達成度については胸腔鏡群で『酸素吸入下歩行』が早く可能となり有意差が見られた。

### 【考察】

CPT終了までの期間については、離床時に開胸群で胸腔鏡群より遅れが見られる傾向であったが術式による差は見られなかった。術後合併症発生の要因は、術中合併症に加えて年齢や術前呼吸機能値、術前合併症等検討する必要があると考える。動作訓練達成度は、酸素吸入下歩行において胸腔鏡群で有意差が見られた。これは他の坐位・立位動作より大きな筋力が必要で、このため疼痛のコントロールが影響することから、より手術侵襲の少ない胸腔鏡で早期に達成が可能であった。目標動作の達成が遅れる原因としては疼痛、呼吸機能の低下、呼吸困難感等が考えられる。